

ロシアにおける文献学の歴史

——ナロードニキの文献学者 H. A. ルバーキンの場合——

佐々木照央*

1. 序

ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ルバーキン (1862—1946) との私の出会いは彼の文献目録『書物の中で』(全三巻, モスクワ, 1911—1915年, 第二版) (①) を5年前に細谷新治教授 (一橋大学) からお借りした時であった。当時はロシア史研究の文献探索の最良の手段を得た思いであった。ルバーキン自体が研究対象になるとは思ってもよらなかった。昨年, 細谷教授の指導による一橋大学経済研究所資料室の研究会で「各国のナショナルビブの現状と歴史」というテーマが与えられ, 私はロシアを担当した。その時に, 私は「ニコンの宗教改革 (十七世紀中葉) での文献目録の利用からルバーキンまで」というロシアの文献目録の歴史を報告した。そこで気づいた点は, ロシアでは文献学の歴史は思想史であること, 図書館運動は革命運動と密接な関係にあること, 文献目録の作成には多かれ少なかれ社会的政治的な目的がこめられていること, また文献目録の形式については西欧・ギリシャで開発された方法を採用入れながらロシアの特殊事情にあわせてそれを変形していること, などである。本稿ではルバーキンに焦点を絞り, 彼の代表作『書物の中で』(第二版)を中心にロシアの文献学の一例を紹介してみよう。

ルバーキン (商人身分の出身) は, ベテルブルグ大学 物理数学学部 自然科学科を首席で卒業し, 作家, 文学者, 歴史家, 図書館学者, 文献学者として 280冊の書物と冊子, 350点の雑誌論文 (新聞は除く), 15点の目録を残した (②6)。そして, 彼は自伝で誇らかに記しているように「ナロードニキ」の革命家であっ

* ささき てるひろ 一橋大学経済研究所

① この紹介を執筆するにあたり, 大切な資料を貸して下さった国会図書館の庄野新氏, 一橋大学の細谷新治氏, 有益な助言を様々な援助をしてくださった宮地見記夫氏, 小林清美氏に深く感謝したい。本稿ではロシア語の「ビブリオグラフィヤ」という単語を「書誌学」ではなく「文献学」という日本語に置きかえた。「書誌学」という言葉で日本で考えられているものと, 本稿で扱うルバーキンの「ビブリオグラフィヤ」は多少異なっており, より広義の言葉「文献学」に置きかえた方がこの場合は適当であると思われたからである。なお文中の○カッコ内の数字は末尾の参考文献の指示番号, ローマ数字は巻号, アラビア数字は頁を示す。

た。『書物の中で』は学者として、革命家としてのルバーキンの世界観が凝縮された文献目録である。これは未完ながらも、三巻本で約1,600頁（一頁に5,600の小活字）、1825年以降のロシア語図書（未完のため自然科学の項は除く）約16,000点（表題では22,000と記されているが実際はもっと少ない）が収録されている。収録点数の割に頁数が多い理由は、各分類項目別に詳細な文献解説が付され、各分野の学の発達と論争過程が説明され、必読必携文献の紹介が詳しくのべられているからである。それ故に、これは単なる文献目録ではなく、後期ナロードニキのルバーキンの見地から記述された社会科学発達史の書である。この目録の副題は『科学・哲学及び文学・社会科学の諸理念に関するロシア語図書の展望の試み。自学自習用の手びき、及び一般教育用図書館、書店の図書購入の体系化のための参考書。』である。この目的にそって目録は作られ、図書選択、分類配列がなされている。ここでは分類をとりあげてルバーキンの目録の特徴を論じてみよう。あえて分類を中心にする理由は、そこに彼の目録作成の思想が最も明瞭にあらわれているからである。

2. 分類の特殊性について

『書物の中で』の大分類は次頁の表1のようになっている。ルバーキンは第一部に配した芸術、文学、文芸批評、倫理道德を「イデアリズム」に属する分野とし、第二部以降を「リアリズム」に属する諸科学と考えた。これらの用語は「観念論」と「実在論」という哲学的背景の区別のために用いられているのではない。彼は「イデアリズム」の分野を「理想創造の学」、「リアリズム」を「実在するものの研究の諸科学」と考えるのである。彼は次のように主張する。「リアリズムはイデアリズムを排除する権限を有しない。イデアリズムとは人間の個人的社会的な生活における『あるべきもの』についての理念という意味であり、諸理想の創造である。『現存するものの研究』という課題と、理想の創造という課題との混同、つまり現実理解の方法とその評価の方法とを混同することは大きな誤りであろう。……それら（諸事象）を真理という見地からのみ評価し、存在するがままを、『あるがまま』の現実の諸事実として精密に冷静に研究することだけに満足してはならない。あらゆる人は自分の願望、欲求、関心という点から、つまり一般に主観の見地から全てを判断する根拠をもっている。」(① I 34) この主観重視の姿勢は十九世紀後半にラヴロフによって展開され、ミハイロフスキィ達によって発展させられた思想である³⁾。

2) Био-библиографические материалы, собранные в 1913-1914 гг. Э. А. Вольтером. «Библиографический сборник», т. I, вып. 2. Пг., 1917, стр. 77. ©257より再引用

3) А. Ваццки著, 日南田静真他訳, 『ロシア資本主義論争』, ミネルヴァ書房, 1975年 42頁～109頁にはラヴロフとミハイロフスキィの思想が適切に紹介されている。

表 1. 『書物の中で』の大分類

第一部 芸術, 文学, 文芸批評, 倫理, . その歴史, 理論, 批評との関係において

第一項 芸術

I. 言語芸術, 文学, II. 舞台芸術, III. 音楽, IV. 絵画, V. 彫刻,
VI. 建築, VII. 芸術一般, VIII. 芸術理論一般, 美学

第二項 文芸批評

第三項 倫理学, すなわち道徳性と道徳的生活の理想に関する学, 道徳哲学.

第一部の補論 1) インテリゲンツィアの問題 2) 歴史における人格の役割の問題

第二部 諸科学

第一項 人類の社会生活に関する学

序. 人類の歴史, I. 宗教・教会, II. 家族制度, III. 国民教育, IV.
政治と法, V. 社会・経済, VI. 物質文化, VII. 統計, VIII. 社会学.

第二項 人類と自然環境

—(以上は発表された部分, 以下未発表の部分有序文に従って再構成)—

第三項 有機的自然

1) 心理. 人間と動物の心理
2) 有機体 a) 人間. 人体の構造と生命 b) 動物界 b) 植物界
r) 原生生物界

第四項 無機的自然

1) 地球物理学, 2) 地質学, 3) 鉱物, 4) 物質とその変化,
5) エネルギーとその転化, 6) 宇宙.

第五項 認識の方法と手段. 認識の理論.

1) 数学, 2) 論理学, 3) 認識論.

第六項 哲学

(① I 94-95, 413-424, ① II 919-930, ① III 199-200より抽出再構成)

ルバーキン自身が彼らの思想潮流に属すると告白しているように, ルバーキンの文献学理論にはラヴロフらの哲学の影響が強く反映している。ルバーキンは図書役割を精神力, 人格の高揚にあるとし, そのために図書は「知識力(科学的知識), 理解力(批判的思惟), 倫理的ヒューマニズム的社会的志向」という三つの要素を備えるべきであるという(① I 13-14)。その三要素を備えたロシアの最高の書物として彼はラヴロフの『歴史書簡』(1868-69)をあげている(① I 14)。人間の「意識」を重視し, 道徳的発達と社会変革を訴えたこの書物の理念をルバーキンは継承した。それ故に「意識」による創造, つまり「想像」の分野を重視し, イデアリズムをリアリズムより優先させているのである。「想像された世界はまず何において

現実に表現されるだろうか、人間精神のいかなる作品の中で人間と人間社会及び人類の良き未来についての希望や願望や夢が具現化されているだろうか。まず第一に、それらは芸術の世界、何よりもまずいわゆる文学作品の中に具現化されている……」

(① I 35) とのべ、「イデアリズム」の分野で「芸術・文学」を彼は分類の最初に配置した⁴⁾。しかし、その配列の順序は単に哲学的な見地からだけでなく、実践的な見地にもよるものであった。

『書物の中で』のサブタイトルには、「自己形成・自学自習用の手びき」という目的が記されている。彼は読者の知的発達の過程を考慮し、「書物の理解に関する問題は何よりもまず読者の学問教育と知的発達についての問題である。この見地から全ての書物はその叙述の難易度に依じて分類されうる」(① I 164) という。しかるに「……小説は全ての分野の中で最も近よりやすい分野であり、ともかく文学的教養を必要とせず、よりよい理解のための特別な鍵を必要としない。学術的な書物は事情を全く異にする。その理解のために、読者はある程度の学術用語の知識、抽象的思考への慣れ、情報の蓄積……を必要とする」(① I 164) とのべる。従って、自学自習者用の推薦図書目録という目的には、はじめに比較的準備を必要としない分野、つまり文学・芸術から入る分類が適当であると考えたのであった。

ルバーキンは芸術・文学の次に「文芸批評」を配した。このことは、ロシア社会思想史上に果たした文芸批評の役割の特殊性によるものである。「文芸批評の内容をもつ諸論文に接するうちに、読者は社会的諸問題や社会的傾向に対する理解を習得していき、私的生活の理想以外に社会的な理想もあること、個人的道徳以外に社会的道徳もあること、そして社会的道徳は個人的道徳と矛盾しないばかりか、個人的道徳と全く同様の諸要求を満足し、全く同じ原理にもとづき全く同じ規範をもつべきことを学ぶ」(① I 42) と彼はいう。彼は「文芸批評」を哲学や社会思想のような意味に解釈しているのに読者はお気づきであろう。ロシアでは文芸批評は特殊な意味をもった。帝政の言論弾圧下において何らかの社会批判を論文あるいは書物の中で発表することは自殺行為に等しかった。そのために比較的当局の検閲にとまりにくい文献目録と文献紹介の欄を思想家達は活用し、文献に書評を付しながら、その書評の中で自己の思想を展開していった。あらゆる雑誌は文献目録文献紹介欄に最も力を注ぎ、この欄の担当者からロシア史に残る秀れた思想家達が輩出した。ペリンスキイ、チェルヌィシエフスキイ、ピーサレフ、トカチョフ、ラヴロフ、ミハイロフスキイ、スラヴ派の思想家達、その他のロシア革命思想の先駆者達はこの欄を活用した。このような習慣はデカブリスト達が「帝国公共図書館」への納本目録を雑誌に掲載したのがその始まりであった (⑧110-142)。文芸批評とは言論抑圧

⁴⁾ このようなルバーキンの考え方をアレフィエヴァはマッハ主義の影響とみる (④102)。

が生みだしたロシア独特の思想表明の場である。社会的諸問題の認識のために読者を文芸批評へと導くルバーキンの考え方も納得できよう。

芸術・文学、文芸批評の次に、彼はその段階をとって得られた社会的個人的理想を「実行」に移させる学問「倫理学」を配置する。「倫理学は人間を……行動するもの、すなわち何らかの目的を追求するものとしてみる」(① I 43)という。「倫理学は人間が生活の創造者として、人々の統一を促進する諸条件の創造者として成長することを援助する」(① I 44)ということから、彼は第一部の人格形成の最終段階に「倫理学」を配したのである。

ルバーキンは第一部の終りに総合的な項目「インテリゲンツィアの問題」と「歴史における人格の役割の問題」を特別に設けた。彼は「倫理学」までの段階を通り「道徳的理想」を追求して人格形成を行なった人々の前衛を「インテリゲンツィア」とよび、「インテリゲンツィアは人類を動かす主たる自覚的な力であり、インテリは何よりもまず批判的に思考し新しい生活の諸形式を創造する、又は最低限それを希求する自覚的な人格である」(① I 401)という。そして「歴史における人格の役割の問題」を最後に置くことにより「大衆、人民、人類、人類の生活、その生活のプロセスそのもの即歴史、に対する影響という意味で、一人格(リーチノスチ)は何をすることができるか」(① I 401)という問題を考察させようとする。

以上の第一部の構成から、ルバーキンの分類にみられる文献目録の目的は、まず第一に「歴史をつくる道徳的人格の育成」にあることが知られうるだろう。これは書物の三要素における「社会的志向」の形成でもある。

第二部に彼はリアリズムに属する諸科学(知識力と理解力の育成)を置く。その分類は、配列と用語の特殊性のために奇異な感じを抱かせるけれども、これは有名なコントの分類をもとにして作られている。コントの場合、順序は数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学、であるが、ルバーキンはそれに哲学、認識論、論理学、心理学を加え、順序をコントの逆に配列したのである(④ I 51-84)。付加した諸科学の位置はスペンサー、ラヴロフ、レセヴィチその他の先人の方法を取り入れており、「その意味では彼はオリジナルではなく多くの他の思想家達の方法を繰返している」(⑩143)という分類学者ケードロフの意見は妥当である。順序を逆にする理由は、より実生活に密着した学問から入る方が初学者・自学自習者にとって実践的な目的にかなう、とルバーキンの考えた(④ I 94)からである。息子の回想によると「ルバーキンは1880年にオギュスト・コントの哲学と『人類教』を知り、直ちにそれに夢中になった。彼は終生コントへの熱中を保ち続け、おそらくこの世で最後の『コント主義者』であった」(②15)という⁹⁾。コントの分類についてル

9) ロシアでは19世紀60～70年代にコントの哲学を熱狂的に受容した(②26～31)。第一次

バーキンは、「……コントの分類はこの世界の整合的で連関的な図式を我々の眼前に展開してくれる。これまでみてきたように、現代の科学的哲学的知識の水準で可能なかぎりこの世界を認識し理解すること、それがすなわち一般的な世界観の形成即一般教育の主要な課題の一つである。……」とのべ、「コントの後継者達の業績を活用しコントの分類図式をより精密に編成して、コント自身はその図式に入れなかったいくつかの科学の位置をまず決定するという最重要の課題を我々は今遂行せねばならぬ」(① I 75) といつて、ルバーキンは学の分類を作つていった。彼はコントの分類が一般教育の面でも図書館用分類の面でも有益であると考へていた。コントを応用しながらも、諸科学の細部の分類にはルバーキン独自の工夫がなされた。例へば、「人間の社会生活に関する学」の中の「社会経済」の項の中は次の表のように分類されている(① II 928-929)。

表 2. 社会 経 済

- A. 現代の社会経済制度の主要な型。
 - 世界経済と国民経済の概観。
 - 国家経済：その歴史と理論。金融と財政法の学。
 - 地域経済：地方自治体と都市。地方自治の問題におけるロシアのゼムストヴォと都市。
- B. 現代社会の階級構成。階級とその発生、現状、闘争。
 - I. 商工業と階級。ブルジョワとプロレタリアート。商工業における階級闘争。労働問題。
 - II. 土地所有関係のしくみ。地主階級と農民階級。
 - 地主貴族と農民。土地所有関係における階級闘争。農業問題。ロシア及び諸外国の農民
 - A. ユートピア。ユートピア社会主義。歴史概観。
 - B. 科学的社会主義。国家社会主義と社会改良主義。
 - B. サンヂカリズムとアナーキズム。
- C. 社会経済の理論。政治経済学とその歴史。

(① II 928-929より抽出)

このような、現状—諸矛盾—その解決としての社会主義—全体を包括する理論、という配置の仕方からも推測できるように、ルバーキンの分類には「社会変革」の理念が優先され、経済学はその変革の理論的基礎を与える手段である。またナロードニキとしてのルバーキンの独自性は、諸々の社会主義を「農民」の項目の中に配

↘「土地と自由」派の活動家フレイは、コントの人類教をアメリカで実現すべく渡米しコンミュンを作つた。ラヴロフ派のナロードニキの中には「コントの図式に従つて全科目を勉強する必要性すら論ずる」者もいたといふ(⑩518)。

置したことに明瞭にあらわれている。「都市労働者」を主体とする革命をめざす社会民主主義（マルクズム）は、普通ならばB Iの中で処理されるのであるが、それをもルバーキンは「農民」の中で扱う。その姿勢はルバーキンの属するナロードニキとその後継者の社会革命党がロシアの社会主義革命の基盤を「農村共同体と農民」にみたことによるものである。そして「科学的社会主義」として、ルバーキンは社会革命党、社会民主党（メンシェヴィキ）、社会民主党（ポリシェヴィキ）の三つを総称する。社会革命党について彼は「社会主義思想のこの傾向は哲学的社会学的世界観においてはラヴロフとミハイロフスキの思想に全面的に依拠し、社会経済的な諸問題の面では主としてマルクスの教えに、個々の命題に対し批判的な態度をとりながらも、依拠する」（①II766）という意味で「科学的社会主義」の名を付したのである。それぞれの文献目録と解説については、社会革命党はルバーキン自身が担当、メンシェヴィキはマルトフ、ポリシェヴィキはレーニンが直接に担当した。レーニンはルバーキンからの執筆依頼を、原稿に一切の変更を加えないという条件で引き受けた。またアナーキズムの項はクロポトキンが校閲し、『書物の中で』全体の校閲はプレハーノフが行なった。この意味でこの項は様々な派の革命家の共同事業であったが、目録全体はルバーキン自身のナロードニキ主義で貫かれている。そのために、レーニン（②111-114）やプレハーノフの側からの批判もあるけれども、後期の主観的ナロードニキの思想がいかなるものであったかを知る上で好材料をこの目録は提供してくれている。

以上、ルバーキンの分類法を概観してきたが、「自学自習者用・図書購入用」の推薦図書目録としては採録された文献の数が多く、彼はその中で難易度に応じた印を付して選別を試みた。ローマ数字のIは初等教育を受けたもの、IIは中等教育を受けた初学者、IIIは専門家、無印はIIとIIIの中間層、という選別を文献の前に示しておいた。また図書館を彼は、1) 農民、工場労働者用の文庫、2) インテリゲンツィアのサークル用の文庫、3) 一般教育用公共図書館、の三つに分け、それぞれ備えるべき必須文献を解説の中で示した。1)と2)は彼が革命勢力とみなす層であり、これ等の結合した諸々のサークルが自分達の「図書館」をもっていたというロシアの実態から、このような図書館の特殊な分け方をしたのである。

ルバーキンの推薦図書目録の目的は何よりもまず「昨日まで打ちひしがれ虐げられていた人間を、自分はなにをしているのか、どこに行こうとしているか、いかにそれをなすべきか、いかに歩むべきか、を理解する人間へと変革すること」（①I156）であった。この目的こそ十九世紀からたえず追求され続けたナロードニキの中心的課題であった。この課題を果すための知的、道徳的な啓蒙の手段の一つ、推薦図書目録の最大のものが、第一次ロシア革命（1905）以後になって合法的な基盤

でルバーキンによって作成されたのである。

3. ナロードニキの革命運動と読書目録

ルバーキンが採用した分類法は決して新しいものではなく、十九世紀70年代から80年代にかけてのナロードニキの秘密革命サークルの読書目録の分類法に良く似ている。当時は無数の読書目録が地下ロシアで作られ、各秘密サークルはその目録に従って読書をしていた。その中の一つ、「自己形成プログラム」をみてみよう。それは1878年か79年ごろに作成され、1880年にモスクワのペトロフ農林学院学生 И. Д. Копаньёвから押収された目録である。これにはアノテーションも序文もなしに484タイトルの図書、雑誌論文が16項目にわかれて記載されている。その配列は、「1) 芸芸批評、書評、伝記、2) 倫理：道徳の基礎理論、3) 人類の原始生活、現代の共同体、それらの相互関係と共同体の社会経済的意義、4) アルテリ、5) 慣習法、6) 労働者階級の状態とそれからの脱出の試み、7) 政治経済学、8) 社会学、9) 社会主義の諸問題、10) 現代社会における国家権力の要素、11) 産業、12) 歴史（仏、独、伊、米、ポーランド、露）、13) 統計、14) 民族学、15) 哲学、論理学、教育学、16) 小説」（⑦64）となっている。この目録は最後に「小説」を配したとはいえ、「芸芸批評」そして「倫理」へ、それから社会的諸問題へと移る方法は、ルバーキンの目録に酷似しており、いずれの場合も「道徳的人格形成」から「社会問題に対する知識」へ導く傾向をもっている。同系統の地下文献目録「カタログ」は配列が多少異なるけれども、やはり「知的・道徳的人格の発達」と「諸科学の習得」を目的とする。1882年作成と推定されるこの「カタログ」の序文によれば、その分類にコントを応用し、変形しているけれども、「この場合、一般的に採用されているコントの分類と矛盾するのではなく、現代のロシアの現実を知るという主要な目的にそれを応用しただけである」（⑦66）というように、ルバーキンと同様の主張をする。この「カタログ」と同型の読書目録には、秘密の非合法出版で大量に流布された「オデッサカタログ」や「チェリャービンスクカタログ」⁶⁾がある（④485-499）。後者は文豪ゴーリキが80年代半ばのナロードニキサークルの中で青年時代にそれに従って読書をしたカタログとして有名である（⑥257, ④948）。このような読書目録の流布について警察当局は「カタログの急速な普及にはある種の不

6) 「オデッサカタログ」と「チェリャービンスクカタログ」の詳しい紹介は、この他に次のものがある。Н. В. Здобнов, Конфискованные библиографические издания 80-х годов. «Каторга и ссылка», 1934, кн 4 (113), 105-121.—Из истории рекомендательной библиографии 80-х годов. «Советская библиография», 1941, № 1 (19), 152-174. (未見)

審な点に気づかざるをえない。これには現時点において青年達に『読書体系』を強制的に教え、青年達を墮落せしめんとする社会革命党員の行動と思われるもっともなふしがある」(⑦69)と報告している。事実、ロシアの帝政に対する革命家側の最も有効な闘争手段の一つは、労働者、農民、青年の「自己形成」と考えられ、その「自己形成」のためにサークルの中で、推薦図書目録つまり読書目録を作り(⑨485)、図書館(文庫)を作る運動が盛んに行われた。

ナロードニキの変革運動は、理論的にはゲルツェン、チェルヌィシエフスキ、ピーサレフ、ラヴロフ、ミハイロフスキ、バクレーニン、スラヴ派、などによって十九世紀60年代に形成されていたが、実践的には60年代の末に開始された。1861年の農奴解放令に続く政府による諸々の改革事業は、63年のポーランド反乱、66年のカラコゾフによる皇帝暗殺未遂事件を経て完全に終りをとげ、再び暗い反動期に入った。教育政策は宗教と古典語を中心とし、それに満足せぬ青年達や高等教育を受ける権利を制限されていた女性達の中には、あるものは国外に留学し、あるものは国内で自分達の自学自習サークルを形成する。70年代に活躍するナロードニキのほとんどすべてがこのようなサークルや帰国留学生から生まれていった。諸々のサークルの中で代表的な最大のサークルを形成したのは、「チャイコフスキサークル」である。この組織の創立者、医学生のアレクサンドロフは1869年ごろペテルブルグ医科大学の学生図書館のライブラリアンをしていた(⑩I 212)。当時大学紛争(⑩16～20)の高まりは始めるなかで、ネチャーエフを中心とする革命派がそのメンバーであるイワノフを殺害するという「ネチャーエフ事件」が発生し、青年達の間にはネチャーエフの革命戦術自体、すなわち帝政転覆をめざす少数者の秘密革命組織による直接の政治闘争さえも嫌悪する傾向が生まれた。ナタンソン達は「青年達が完全なアパシーの状態にある、彼らはネチャーエフ達の壊滅におののき相互不信の念が支配している。彼らの精神を昂揚し、育成せねばならぬ」(⑭52)と感じ、ネチャーエフと対照的な戦術「道徳的人格形成」を目標に活動を始めた。図書館員の立場を利用して、ナタンソン達は出版社、書籍商と緊密な関係を

り このような情勢をロシア政府は看過しなかった。1865年に原稿段階の事前検閲を少し緩和する臨時規則を制定したが、そのかわりに印刷後の検閲を強化する諸々の方策を政府は考えた(⑧139)。「書籍事業管理局」は図書出版を監視した。その長官になったのは、50年代にチェルヌィシエフスキ達と『現代人』誌を中心に急進的な活動をして、60年代に転向した有名な文学者ロンギノフである(②6～7)。ロンギノフは「禁本目録」の作成、カレントな出版物総目録の発表(『官報』及び『書籍事業管理局報』、1869年より)に力を入れた。彼は「図書館」や「読書目録」を中心とした書籍宣伝活動、自己形成運動を危険視し、国内での取締り(1871年ナタンソン流刑)、国外のチューリヒのロシア人留学生の帰国令(1873)を発した。チューリヒでも留学生達は自分達の「図書館」を中心に結合していた(②29～32)。

築きあげ、半額以下で図書頒布ができた (㉑ I 212)。それを各地のサークルに配布する (配布図書目録は㉑345-347参照) ことで彼らの革命事業は始まった。諸々のサークルは結合の中心に自分達の「図書館」^㉑をつくり、「図書館員」を置き (㉑ I 100-101)、「読書目録」をそなえていた。それらのサークルに書物を補充することによってナタンソン達は全国的な革命宣伝団体を築いていった (㉑109-113)。チャイコフスキィサークルの一員だったチホミーロフの回想によると、「それは、一定のプログラムにそった読書会のために集まった男女の青年達の諸サークルであった。プログラムはサークルのより秀でたメンバーが作成するか、文学者やリベラルな学者のなかで青年達の尊敬を集めた様々な人物によって作られた。図書目録が傾向をもって選択されたものであることはいうまでもない。図書は哲学的な面ではおしなべて唯物論的で、政治的には革命的、社会主義的であった。そういった本を読み進み、研究報告がなされ討議された。これが『体系的な読書』と名づけられた」 (㉑ 53) という。

チャイコフスキィ団はこのような「図書館設置」と「読書目録」を手段にした書籍運動による啓蒙宣伝を、学生から出稼ぎ労働者のサークルへと広げていった (㉑ I 245-247)。「知的道徳的人格形成」を重視する派のナロードニキにとっては、74年夏に最盛期を迎えるヴ・ナロード運動は、以上のような啓蒙宣伝の活動を「農民」にまで広げるものであった。しかし、重税と圧制にあえぐ文盲の民を前にして、革命宣伝家にとってまた人民にとって「知識」は社会革命を起すうえで必要か否かの論争が激しく行なわれた。「知識否定派」(バクーニン派)は直接の扇動による農民反乱を主張した。「知識肯定派」(ラヴロフ派)は自分自身の人格形成と人民の教育宣伝による「革命の準備」を唱えた。後者にとってその手段は自分達がとってきたと同じように、農民・労働者の組織化と組織内における「読書運動」であった。しかし、どちらの派のナロードニキも当局の徹底的な弾圧にあって運動は壊滅状態になった。この運動を「言葉による宣伝」の失敗とみたチャイコフスキィサークルは革命の「行動」を重視する戦術へと切替えた (㉑65-67)。こうして、読書運動から宣伝へ、宣伝から直接の革命行動 (扇動, 政治テロ) へと運動の形態は変化し、1881年3月の「人民の意志」党による皇帝暗殺へとたどりついていく。この過激化の過程で70年後半からそれまで必ずといっていいほど記されていた「図書館設置」の文言は革命派の綱領から表面的にはあまり見られなくなった (㉑ II)。しかし、実際には革命派の活動の基礎に「読書目録」が存在し続けていたことを先に紹介し

㉑ 自分達の「図書館」をもつ運動は69年の大学紛争の最中に高まっていった。時としてそれは単なる遊びや好奇心の産物であった。「…しばしば私達は警察が図書館を追跡していると思えた。そのことが私達の好奇心を高め興味をそそった」 (㉑36) という。

た警察押収資料は物語っている。

4. ルバーキンの略歴

ルバーキンは「人民の意志」党のテロ活動の絶頂期1881年にペテルブルグ大学物理数学学部自然科学科に入学した。同じ学科にレーニンの兄、アレクサンドル・ウリヤノフが83年に入ってきた。ルバーキンは入学後神経衰弱の病気と、コントに熱中してペテルブルグ大学にある全ての学科をマスターしようと思い他の二学部（法学部、歴史文学部）の授業も受けた（②15）ために進級が遅れ、ウリヤノフと共に学んだ。最優秀者に与えられる金メダルをウリヤノフは86年に、ルバーキンはその翌年に受けている。二人は友人となり同じ研究サークルに属し、ルバーキンはウリヤノフの感化で「学生組合」に入った。ルバーキンは80年代の前年に社会主義文献の配布や非法法文献の執筆をし、ナロードニキの革命運動に参加していた。彼は「ペテルブルグ学生組合」のメンバーとして「革命出版物の配布に従事した」罪で85年5月末決勾留され、後に一年間の監視処分の刑を受ける。87年のウリヤノフ⁹⁾の皇帝暗殺未遂事件と彼の死刑はルバーキンに大きな衝撃を与え（その衝撃はウリヤノフを悼むルバーキンの詩にあらわれている—註9プロコベンコ参照—）、ルバーキンは友の死刑によって革命家となったと告白している（②17）。大学を87年に卒業した後、彼は主として合法的な地盤でジャーナリズム、出版界で活動する。彼の母は1875年からペテルブルグで貸本屋を開いていたが、92年に彼はそれを受け継いだ（③381）。彼の貸本屋は進歩的な活動家達の集合の場となった。彼は従来のナロードニキの書籍宣伝の成果が思わしくない原因を解明するため（④94-95）人民の読書の実態と人民向けの書物の研究を続け、教育者達や様々な階層の人民との大量の文通によって「人民の読書論」を築いていく。1888年、『ロシアの富』誌12号に掲載した「人民のための読書プログラム試論」、ペテルブルグ読み書き普及委

9) アレクサンドル・ウリヤノフも非法法のサークル用の推薦図書目録つまり読書目録の作成をしていたという。А. Елизарова, А. И. Ульянов и П. Я. Шевырев по воспоминаниям Говорухина. «Пролетарская революция», 1926, № 7 (42), 118-123. ウリヤノフとルバーキンの関係については、В. Прокопенко, Николай Рубакин и Александр Ульянов. «Дружба Народов», 1966, № 6. с. 226-228. がある。また、ルバーキンが入学した当時、「人民の意志」党の学生組織がペテルブルグ大学に存在し、秘密出版の新聞『闘争』及び雑誌『学生』を発行しながら中心的な活動として『読書プログラム』という文献目録作成を行っていた。この学生組織は「ペテルブルグ大学中央サークル」といい、「人民の意志」党がデガエフの密告で潰滅状態となった時も無事に生残り存続したという。С. С. Волк, Революционные издания народовольческих кружков петербургского университета в 1882 г. в кн.: Очерки по истории Ленинградского университета II. Изд-во «ЛГУ», Л., 1968. с. 53-59.

員会での報告「人民の読書論」など一連の作業は『書物の中で』に結実する文献学理論の構築の布石であった。彼は95年にリャザンに追放される。その原因は警察資料によると、ペテルブルグ読み書き普及委員会の活動が「政府の意向に合致せぬ精神で発展し、遠からぬ将来、極めて望ましからざる結果にいたりうる……」ということ、「ルバーキンが極めて重要な中心人物であることは疑いなく、『読み書き普及委員会』の合法出版物の配布の他に、必ずしも合法的でない事実にも従わっているようである」(㉔21-22)ということであった。リャザンでも彼は『人民用の文学の研究のプログラム試論』、『ロシアの読者大衆に関するエチュード』(㉔31-104)を著し、人民のためには「三文小説や『人民用の』小説ではなく、本物の文学、すなわち古典や人間の英知が生んだ全ての珠玉の作品を読ませる」(㉔27)べきことを訴えた。この意味で、人民にはプーシキンなどの芸術はわかりえないと考えたレフ・トルストイやピーサレフをはじめとする従来の見地とルバーキンは異なっていた。1901年、カザン寺院広場の学生デモ隊に対する当局の弾圧に抗議した罪で、ルバーキンはタヴリダ県アルシュトに流刑された(㉔383)。そこで彼は誕生まもない社会革命党に入党する(㉔48)。彼はアルシュトからクリミアに流刑の地を移り、1903年に刑期を終えるとジュネーブに行った。そこで在外の社会革命党員やブレハーノフらと接触する。その年に病気のため帰国した彼は1904年「全露職業技術教育者大会」(帝国技術協会主催)を利用して、「人民の自学自習者」という報告を行ない、その報告に革命を称揚する内容をもりこんだ罪でその2日後にプレーヴェ内相の命令により永久国外追放となり、再びスイスに行く。1905年の第一次ロシア革命とその年の秋のプレーヴェ暗殺の結果、彼の処分は解除になり帰国を許された。彼は1902年の四月のシビャーギン内相暗殺に関与し、社会革命党の戦闘団の活動に直接間接に加わりながら(㉔48-62)、1903年から『書物の中で』(第一版)の作成に着手し、1905年の革命で言論出版の自由のわくが広げられた直後1906年(実際は1905年の末)に発表した。第一版は収録点数7,500で1904年以前の文献を含んでいた。それは方法論においてもまだ未完成の状態であったこと、革命後の言論の自由の拡大により急速に出版物が増加したという時期的な不運などから、成功したとはいえなかった(㉔187-188)。

1906年、彼の息子アレクサンドルが革命歌集作成のかどで逮捕されると、彼自身も身の危険を感じペテルブルグからそこに近いフィンランド側に居を移した。ペテルブルグを去るに際し、彼は115,000~130,000冊にのぼる蔵書を、革命後に誕生した合法的啓蒙団体「全露教育連盟」に無料で寄贈した(㉔384)。1906~07年にかけて革命後の反動期に入り、社会革命党の出版社も潰されていき(㉔134-136)、彼の逮捕も時間の問題となった時、1907年にスイスに亡命した。1909年、社会革命党の中

心人物アゼフが警察のスパイであった事実が証明された (②178-184)。ルバーキンは1903年からアゼフに疑念を抱き追跡調査を続け、アゼフの正体の暴露に貢献した一人である (②102)。「アゼフ事件はエスエル党から永久に脱退する気持を私に起させたばかりでなく、自分の革命観から一切のテロリズムを放棄させた」(②146)とルバーキンは告白する。1909年に彼は社会革命党を離脱し、それ以後文献学の理論的構築と『書物の中で』(第二版)の作成に没頭した¹⁰。しかし革命家達との親密な関係は保ち続け、彼の文庫は在外の各派の革命家のたまり場であった。メンシェヴィキのブレハーノフ、マルトフ、マースロフ、ポリシェヴィキのレーニン、トロヤノフスキ(前駐日大使の父)、クルプスカヤ、ルナチャルスキ、そしてナロードニキの人々E. ラザレフ、B. フィグネルなどをはじめ多くの革命家がルバーキンの文庫を利用した (②)。ゲルトエンの娘ナターリヤの文庫、第一インターの活動家グスタフ・プロシェの文庫が彼の文庫に加わり、またも膨大なルバーキン文庫ができあがっていった。

1917年の「2月革命」の方はルバーキンは熱狂して迎え、その気持を伝える冊子 (②) を書いている。しかし「10月社会主義革命」は複雑な気持ちでみていた。彼の友人で有名な作家のロマン・ロランの手紙によるとルバーキンは「今の統治者達(ポリシェヴィキ)と思想を一にするわけではないけれども、彼の期待にそって開けた洋々たる未来に向って、せきを切ってでていく新しい生活の奔流に、歓喜している」(②109)と記し、ルバーキンの革命歓迎の様子を伝えている。しかし、その喜びも最初のうちだけであった。彼は引き続きロシア国内の内乱に心を痛め、宗教的にロシアの民を救済しようと企図したアメリカの伝道師達と行動を共にして、ロシア人にヒューマニズムの念を植えつけるための書物を執筆した。ロマン・ロランとの親密な交際 (②106-111) のころ、第一次大戦期から革命期にかけて、ルバーキンはトルストイ主義に傾き、その後1930年代からガンジーと知り合いガンジー主義に傾倒していたという (②146)。文献学の分野では1916年ジュネーブのルソー教育研究所にビブリオ心理学部門が設置された後、彼は主観重視の立場をさらに徹底させた「ビブリオ心理学」の構築に没頭する (④103-112)。不可知論をもとにしたこの理論に従うと、「言語、文章、書物は意味の伝達物ではなく、各個人の記憶内の心理的追体験を喚起するものである。このことは、作家が自分の作品に何をこめようが、演説者が演説で何をいおうが、その内容は講者ないし聴衆に届きはしない、ということの意味する。……あらゆる読者聴衆は他人の言説に自分個人の反映をみるにすぎない」(②139-140)という。それ故に「書物は読者の個人的感謝と思惟を

10 この時点でもロシア国内の様々な人々との大量の文通によって読者に関する研究を続けている (⑤)。

呼びさます、……そこに書物の価値がある」(②140)という¹¹⁾。しかし、「書物や言語が内容を伝えるものでない」としたら、その推薦図書目録を作る行為は何を意味するであろうか。『書物の中で』は未完に終わった。理由は出版社とのトラブルとされている(②4)。しかし、「ビブリオ心理学」への没頭という彼の内面的事情にも未完の一因があろう。

ルバーキンは次第にソ連で忘れられていく。彼の膨大な書物、論文、目録などはスターリン時代に完全に黙殺された。しかし、ルバーキンは自分の85,000~100,000冊にのぼる文庫を死後に祖国ソ連へ寄贈した。亡命後に集めたこの文庫はレーニン図書館にある。亡命前に無料で寄贈した文庫は利用者達の不道徳で散いつし、文庫の価値を失なっており、数々の図書館に分けられてしまった。

本稿ではより主観的傾向の強いナロードニキのルバーキンをとりあげてみた。ナロードニキの代表的な文献学者としては、他によりリベラルな傾向のヴェンゲロフ、より唯物論的見地の強いチェルノフ(⑬)(元「人民の意志」党員)がいる。他にも多数の秀れた文献学者をナロードニキは輩出し、モスクワビブリオサークル(1889—1930)、ロシアビブリオ協会(1899—1930)を中心にナロードニキ文献学者達が活躍しているが、その紹介は別の機会にゆずろう。今回はルバーキンを借りてロシアの文献学の歴史の一端をみてきた。序で紹介したように、文献学と社会思想はロシアでは密接な関係にある。この面からのロシア史研究はソヴィエトで歴史研究者よりも文献学者図書館員によってこの20年間に急速に進んでいる。この成果の謙虚な吸収が今まで日本で見逃されている。帝政ロシアの言論弾圧下における数少ない思想表明の場の一つであった文献学や、変革運動の実践の一つのあらわれとしての図書館運動及び出版活動の研究は、ロシア史研究の深化のためには不可欠であると思われる¹²⁾。

引用参考文献

- ① Н. А. Рубакин, Среди книг. Опыт обзора русских книжных богатств в связи с историей научно-философских и литературно-общественных идей. Справочное пособие для самообразования и для систематизации

11) ビブリオ心理学に詳しく言及する余裕は本稿ではなかった。バヴロフと文通しながら、条件反射の理論を応用したり、ロシアフォルマリズムのポチェブニャの考え方を取入れていくルバーキンの方法には注目すべき点も多く、また別の機会に紹介するつもりである。参考文献(②126~147, ④102~112)にその研究が言及されているので興味ある方は参照されたい。

12) 本稿ではルバーキンの多くの著作、ルバーキンに関するいくつかの重要な研究書、論文などが未使用である。その中でも特に最近ソ連で出た К. Г. Мавричева, Н. А. Рубакин. М., 1972. を見る事ができなかったことは心残りである。

- и комплектования общеобразовательных библиотек, а также книжных магазинов. Издание 2-е, дополненное и переработанное. т. 1, М., 1911. т. 2, М., 1913. т. 3, М., 1915.
- ② А. Рубакин, Рубакин (Лецман книжного моря). М., 1967.
 - ③ Е. П. Арефьева, Н. А. Рубакин—как книгосбиратель и его библиотека в Советском союзе. “Книга : исслед. и мат.”, сб. 8, М., 1963.
 - ④ —Пропаганда книги и руководство чтением в трудах Н. А. Рубакина. “Книга : исслед. и мат.”, сб. 12, М., 1966.
 - ⑤ Н. М. Рассудовская, Переписка Н. А. Рубакина с читателями из народа по вопросам самообразования. “Советская библиография”, 1963, № 2.
 - ⑥ С. А. Рейсер, Хрестоматия по русской библиографии с хі века по 1917 г. М., 1956.
 - ⑦ —Подпольная рекомендательная библиография 70-80-х годов хіх века. “Советская библиография”, 1960, № 1.
 - ⑧ Библиография: Общий курс. Под ред. М. А. Брискмана и А. Д. Эйхенгольца. М., 1969.
 - ⑨ Н. В. Здобнов, История русской библиографии до начала хх века. Изд. 3-е. М., 1953.
 - ⑩ Б. М. Кедоров, Классификация наук. 2: От Ленина до наших дней. М., 1965.
 - ⑪ О. Д. Голубева, Издательское дело в России в первой Русской революции (1905-1907 гг.) “Книга : исслед. и мат.”, сб. 24, М., 1972.
 - ⑫ М. В. Машкова, История русской библиографии начала хх века (до октября 1917 года). М., 1969.
 - ⑬ Ю. В. Григорьев, К. Н. Дерунов (К 100-летию со дня рождения). “Советская библиография”, 1966, № 5.
 - ⑭ Воспоминания Льва Тихомирова. М.-Л., 1927.
 - ⑮ Воспоминания Вл. Дебагория-Мокриевича. СПб., 1906.
 - ⑯ Н. Фроленко, Собрание сочинений в двух томах. 2-е изд. М., 1932.
 - ⑰ Н. А. Чарушин, О далеком прошлом. Изд. 2-е. М., 1973.
 - ⑱ Автобиографии революционных деятелей русского социалистического движения 70-80-х годов. “Энциклопедический словарь ГРАНАТ”, т. 40.
 - ⑲ Революционное народничество 70-х годов хіх века. тт. 1-2. М., 1964.
 - ⑳ В. А. Малинин, Философия революционного народничества. М., 1972.

- ⑳ В. И. Ленин, Полное собрание сочинений. Издание 5-е. Т. 25, М., 1961.
- ㉑ Л. М. Добровольский, Запрещенная книга в России (1825-1904). М., 1962.
- ㉒ Alfred Erich Senn, Nikolai Rubakins's Library for Revolutionaries. "Slavic Review", Sept. 1973, vol. 32, no. 3.
- ㉓ — The Publication of Sredi Knig. Introduction of Republished "Sredi Knig" in Great Britain. Cambridge, Oriental Research Partners, 1973, pp. V-XXVIII.
- ㉔ 和田春樹 ニコライ・ラッモル—国境を越えるナロードニキ. 上, 中央公論社, 東京, 1973.
- ㉕ 荒畑寒村 ロシア革命運動の曙. 岩波新書. 岩波書店, 東京, 1960.
- ㉖ 佐々木照央「ラヴロフと1870年代の革命運動」『ロシア研究』, No. 24, 1975.
- ㉗ N. -A. Roubakine, Qu'est-ce que la Révolution Russe?—Faits, statistiques, perspectives historiques et sociologiques. Genève, s. d. (1917).
- ㉘ Н. А. Рубакин, Избранное в двух томах. Т. 1. М., 1975.

各種雑誌
 合本
 図書修理

製 本

各大学官庁及会社御用達



日本図書製本株式会社

本社 東京都江戸川区東小岩 1-30-4
 工場 東京都江戸川区北篠崎 2-248
 電話 東京 (03) 670-8631番(代)